

Ⅲ 研究開発

1 地域を担う人材育成のためのプログラム

今年度までに、総合的な学習の時間を中心に進めてきたプログラム「三崎おこし」を「地域デザイン」の観点から見直し、取捨選択、統合、再編等により効果的な活動へと組み直した。また、これまでは本校の立地上、学校周辺を中心に行ってきた活動を町内全体の活動へと発展させられるよう、研究を進めた。

地域を担う人材育成のためのプログラムでは、「地域資源活用プログラム」、特産品の開発や情報発信などの「課題研究」、外部人材との交流などを行う「県外フィールドワーク・講演会」、「地域理解」という4領域での探究活動を行った。

(1) 地域資源活用プログラム

① ブイアートプロジェクト

海岸の漂着ごみであるブイ（養殖業で使用する直径30センチメートルほどのプラスチック製の球体の浮き）をごみではなく資源としてとらえ、アート作品として再利用するとともに、海洋ごみ問題について考えるきっかけにするというもの、ブイアートプロジェクトである。本校では、平成27年度に地域の人たちと海岸清掃ボランティアを行った際に、海岸に多くのゴミが漂着している現実を知ったことをきっかけにブイアートプロジェクトに取り組みることになった。ブイアートプロジェクトでは、主にアート作品を制作する「ブイアート活動」と、ブイを使ったアクティビティイベントである「ブイリンピック活動」の二つの活動を行っている。

本年度は、伊方町観光交流拠点施設「佐田岬はなはな」で行われた「はなはな祭り」で、「ブイリンピック」を実施した。本年度は、「ブイ釣り」、「ブイカーリング」、「ブイパカパカ」、「ブイ入れ」の4種目を実施した。激しい運動ではなく、誰でも楽しめるように種目や内容を工夫したため、年齢性別を問わず多くの人の参加があった。特に子どもたちに人気で、家族や祖父母とともに楽しむ姿が多く見られた。一緒に参加した大人にも「楽しかった」「他にも種目がありますか」と声をかけてもらい、生徒たちも励みになっていた。

また、全国連携ブイアート事務局からの依頼を受け、11月24日に「はまぎんこども宇宙科学館」（横浜市）で開催されたブイアートイベントで使用するブイの制作と、サンプルブイの制作を行った。これまで続けてきた活動が大きなものになり、自分たちが準備したブイが他県に渡り、そこでの活動に使われるということで活動に参加した生徒たちは積極的に活動していた。このように、自分たちの活動が地域や外部とつながっていくことが生徒たちにとっては感動体験になり、自己肯定感が高まるということを感じた。

地域で行われたブイアートイベントにも参加し、町内外の小学生に対してブイアートのワークショップを行った。他者にワークショップを行うことは、自分たちが作品を作ったり、自分たちが考えたブイリンピックを運営したりすることとは違う難しさがあり、初めは戸惑いも見られた。しかし、すぐに慣れ、スムーズにワークショップを行うことができた。今後は、地域でのブイアートワークショップ等をさらに行っていきたいと考えている。

本年度の活動は、漂着ごみであり地域の課題となっているブイを地域資源ととらえてアートやアクティビティイベントを実施してきた。来年度は、ただのイベントにとどまることなく、ブイアートプロジェクトをきっかけに、マイクロプラスチックなどの海洋ごみの問題や、海の豊かさを守る取組についても研究を行うとともに、そのことを外部に発信していくという取組も行っていきたい。特に、地域の小・中学生と連携して活動を行うことで環境教育の一環とするとともに、郷土愛をより高められる活動にしていきたい。



② みさこうマルシェ（廃校活用イベント）

廃校活用イベントでは、せんたん部が中心となり、廃校になった地元中学校を活用した「みさこうマルシェ」の企画・運営を行った。かつてはにぎわいを見せていた伊方町も少子高齢化が進行し、学校の統廃合を余儀なくされ、旧三崎町に九つあった小学校と三つあった中学校が、今では一校ずつになっている。廃校になった校庭は草にあふれ、校舎は当時のままの面影を残してはいるが、年々色あせていっている。その様な校舎が、この旧三崎町の各地区に点在している。地域にとって学校という存在は、そこに住む人たちに生きる活力を与えるものである。このイベントは、子どもの数が減少し、保育所、小学校、中学校が廃校になってしまい、活気が失われつつある二名津地区を元気にしたい、という生徒の思いから企画された。

空き店舗や空き家の活用は、伊方町でも大きな課題となっている。三崎高校でも空き家の活用について研究を行い、カフェや交流スペースの運営などの計画を考えたが、責任の所在や光熱費の問題等があり実行には至らなかった。そこで、閉校後は地域の公民館として利用されていた二名津中学校を活用したイベントである「みさこうマルシェ」を計画した。これは、一昨年度に行なった「漂着物アートフェスティバル」、昨年度に行った「佐田岬ジャンボリー」を発展させ、さらに多くの人に楽しんでもらえるものにしたと考え、企画したイベントでもある。

二名津中学校は、現在地域の公民館として利用されているが、年間を通しての定期的な利用者はおらず、専任の職員がいるわけでもないため、掃除等の手入れはされておらず汚れが目立つ箇所も少なくなかった。本校も、2年前から年に一度イベント会場として利用しており、毎回その直前に清掃を行っていた。本校がこれまでに行ったイベントでは、使用する教室が一つであったため、清掃箇所は全体の一部にとどまっていた。しかし、本年度の「みさこうマルシェ」では中学校全体を会場として使用するため、清掃や片付け、各教室のセッティングなど多くの時間をかけて各種準備を行った。準備が整った段階で、建物全体が明るくなり、このような施設を定期的に変更し、機能を維持していくことが空き家等の活用においては重要なポイントになると感じた。

本校の生徒だけではなく、川之石高校、小田高校の生徒やワークショップや飲食店、消防車両の展示など 15 以上の外部団体にも参加してもらった。学校のホームページやフェイスブックで告知を行ったほか、生徒が行うゲームの招待券を付けたポスターを三崎地区の保育所に配布し、町内や八幡浜市の児童センターや図書館などにも置かせてもらうことでPRを行った。その結果町内外から 200 名を超える来客があり。地域の人からも、「学校がなくなって寂しくなっていたが、楽しそうな声が聞こえてうれしかった。ぜひ、来年も実施してほしい」と喜ばれた。

これらの活動を通して、生徒は様々な視点から地域を見つめ直すことで、地域や地域資源の価値を再発見し、地域への愛着を高めることができていた。また、企画から運営までを行うという各過程の中で、調整力や実践力、コミュニケーション力といった本事業を通して育成したい力を、総合的に伸ばさせることができる機会になった。生徒たちは、自分たちのプロジェクトへの反応が直接帰ってくることに達成感を感じており、自己肯定感を高めることにもつながっていた。



(2) 課題研究

課題研究としては、「情報発信」、「イベント」、「特産品開発」という三つの部門を設定した上で、より具体的な七つの研究班を編成した。生徒は、自らが興味のある研究班に所属し、探究活動を行った。

① 情報発信部門

情報発信部門は、「アート」、「情報・防災」の二つの班に分かれて活動した。

アート班は、ロータリーから正門に続く約 500 メートルの坂道、通称「未咲輝ロード」の壁画修復及び加筆を行った。未咲輝ロードは、通学路を明るく彩ることで生徒だけではなく、そこを通る全ての人に明るい気持ちになってもらいたいという思いで平成 25 年に整備された。壁画の制作や、生徒一人一人の年間目標パネルを設置するなどして、学校を訪れる多くの人に楽しんでもらっている。生徒の目標パネルは毎年付け替えているが、壁画は制作当時のままのため、年数の経過や風雨の影響により、傷みが目立つ部分も出てきていた。そ

ここで、話し合いの結果、ただ修復するだけではなく、より良いものにできるよう加筆も行うことになった。

まずは、壁面に生えた苔を除去し、たわしで表面をきれいにするなどの下準備を行った。次に、絵の具が剥がれ落ちている箇所を点検を行い壁面の修復を行った。その後、どのような絵を追加するかを話し合い、加筆を行った。新たに、風車や海鳥などを書き加えることで、より華やかな壁面に生まれ変わらせた。

また、集落等コミュニティ課題解決・実践プログラム「せんたん劇場」においては、外部の芸術家と協働してプログラムの中心となるアート作品の作成やカフェ班と連携してのりヤカー屋台の製作などを行った。

今後は、町内各集落でのアートイベントの企画や、ブイアートプロジェクトと連携したアート活動などを行っていく予定である。



本校は災害時の緊急避難場所となっており、地域の防災拠点としての役割を担っている。本校では、校内での避難訓練を年に二回実施しているが、これらの訓練は災害発生時に「自助」の観点から、自分たちが安全に避難することを目的に実施している。しかし、本校が緊急避難場所として機能するためには、生徒たちが役割を担う場面も想定される。また、地域においても「共助」の観点に基づく行動が求められることにもなる。その際、現在の避難訓練だけでは不十分な場面が出てくることが予想されていた。そこで、情報・防災班は、校内の危険箇所の確認や、避難誘導模擬体験、妊婦や車いす使用者の避難訓練体験等、避難所設営時の課題点等の研究を行った。また、地域の特別養護老人ホームの協力を受け、避難所開設・運営に必要な知識や技術を学ぶための、避難所運営ゲームを実施した。これらの活動を通して、生徒たちは自分たちの防災意識を高めるとともに、地域全体の防災意識を高めることの必要性を認識することができた。

せんたん劇場においては、地域住民への聞き取りを基にした防災紙芝居と、海岸が近いという地域の特性を盛り込んだ、津波・水害の被害防止を啓発する防災かるたの製作及び実演を行った。

今後は、地域防災マップの作製や、地域連携避難訓練、地域の特別養護老人ホームと提携して福祉の視点を取り入れた避難所設営や防災避難訓練の実施等を予定している。さらに、家庭科の授業や商品開発班と連携して、地元の特産品である魚介類や芋類、柑橘類等を活用した燻製やドライフルーツ等の保存食の研究を行っていく予定である。また、これらの情報をホームページやフェイスブック等を活用して効果的に発信していきたい。



② イベント

イベント部門は、「イベント」、「カフェ」の二つの班に分かれて活動した。

イベント班は、地域の大きな行事である「はなはな祭り」や地域の保育所、老人介護施設等で「みさこうたいそう 115」を実施した。「みさこうたいそう 115」は、平成 29 年度に伊方町、愛媛大学と連携して取り組んだ、「健康型講座－高齢化の進む地域の活性化のために、高齢者を対象とした健康教室やダンスでの活性化－」の探究活動を通して誕生した健康体操である。この名前は「みんなで さいこうの このまちを うみだそう」という、生徒たちの思いの頭文字を取って作られたものである。三崎高校の愛称の「みさこう」とも掛けている。また、115 という数字には、「伊方町の健康寿命を 115 歳まで伸ばしたい」という思いが込められている。振り付けはもちろん、名前にも生徒たちの思いが詰まった世界で一つの体操が完成した。

その後、「みさこうたいそう 115」は地域の中で浸透し始め、地域のイベントはもちろん、地元中学校の体育祭などでも行われるようになった。また、地元ケーブルテレビの全面的な協力のもと、健康体操として毎週土曜日の早朝に放送してもらっている。「みさこうたいそう 115」は子どもから高齢者まで、誰もが気軽に楽しく取り組むことのできる体操である。体操に参加してくれている人は、みんな本当に楽しそうに体を動かしている。生徒たちにとって、地域の健康増進と世代を越えたふれ合いにつながっているという実感を得ることができているようで、達成感につながっている。

また、本校文化祭において、愛媛大学ダンス部と共同開発したダンスを披露した。せんたん劇場では、「みさこうたいそう 115」と地区に伝わる伝統行事である「しゃんしゃん踊り」の実施及び、ウォークラリーの企画及び運営を行った。

今後も、各種地域行事や、小・中学校の行事等と連携して「みさこうたいそう 115」を通じた健康増進活動等を行っていきたい。



カフェ班は、地域の空き家等を活用した交流カフェの実施に向けて研究を重ねた。しかし、定期的に使用可能な建物の確保が困難であったため、町内で行われる各種イベントでの出店へと実施内容を変更しての研究活動を行うこととした。カフェのメニューとして、地域

の特産品である「ちりめん」と「じゃこ天」を使用したピザを開発し、「みさこうマルシェ」と本校文化祭で販売した。ピザというメニューは、老若男女問わず気軽に食べやすい、本校に移動式のピザ窯があるという理由から設定した。また、伊方町主催で行われた「佐田岬ワンドークリスマス」というイベントで、地域の特産品であるさつまいもを使って開発した商品を販売した。実際にカフェを運営するだけでなく、提供するメニューを開発するなど総合的な探究活動に取り組んだ。その過程を通して、生徒たちは地域の特産品への理解を深め、地域への愛着を高めることができた。

せんたん劇場では、アート班と連携してリヤカー屋台を製作し、イベント当日には研究開発したさつまいもポタージュとコーヒーの提供を行った。

今後は、せんたん部の作成したマーマレードを使用したカフェメニューや地域のの産物を生かした新たなカフェメニューの開発、リヤカー屋台を活用した町内各集落におけるコミュニティカフェの実施等を行っていく予定である。



③ 特産品開発

特産品開発部門は、「商品開発A」、「商品開発B」の二つの班に分かれて活動した。

商品開発A班は、三崎地区の伝統的な織物である「裂織り」を使用した商品開発や地元の農産物等を使った新たな商品開発に関する研究を行った。

「裂織り」とは、古着や端切れを裂き、横糸として編み込んだ織物である。物が不足している時代に考案されたリサイクル文化であり、多くの家庭で裂織りが行われていた。しかし、現在各家庭における裂織り文化は途絶え、保存会の会員や地域おこし協力隊員が製作しているのみとなっている。保存会によりコースター等が製作され、地元の道の駅などで販売されているが、知名度は高くない。そこで、高校生が地域文化の担い手として裂織り文化を学ぶとともに、新しい視点から裂織りを活用した商品開発を進めていくことで地域文化の継承・発展に寄与したいと考え、研究に取り組んだ。

保存会の人々が活動している「オリコの里」で話を聞き、裂織り製作の指導を受けた。その後生徒たちで研究を重ね、コースター、ランチョンマット、ヘアゴム、トートバッグ等を作成した。現在の課題としては、一つの商品を作るのに時間がかかるため商品の安定供給が難しいことや、裂織りについて、より多くの人に知ってもらうことができるような情報発信を行っていくことなどが挙げられる。今後は、商品化に向けて、保存会や地域おこし協力隊員にもアドバイスをしてもらい改良を重ねることに加え、製造・販売のルート開発等も含め、さらなる研究を重ねていく予定である。また、地元でUターンし、藍染めを行っている本校卒業生に、藍染めをしてもらったハンカチに裂織りのタグを付けた商品「あいたおる」を試作し、来年度の販売に向けて研究を進めている。地域の特産品を組み合わせた新たな商品を作り、6次産業化等も踏まえた上で、地域の産業として継続的な販売を行っていくことができるような仕組みづくりについても研究したい。

さらに、せんたん部と協働してのマーマレードの研究や情報・防災班と協働しての地域の特産品を使った保存食づくりも引き続き行っていく予定である。



商品開発B班は、自然体験学習担当の伊方町地域おこし協力隊員と協働して、地元の交流施設である、瀬戸アグリトピアで栽培しているブルーベリーの活用について商品開発を行った。研究の結果、ブルーベリーをジャムにし、そのジャムを生地に練り込んだブルーベリークッキーとブルーベリーパンを製作して「みさこうマルシェ」で販売した。また、カフェ班や商品開発A班と協力して、瀬戸アグリトピアで栽培されているさつまいもの活用方法の研究を行った。瀬戸アグリトピアでは、シルクスイート、紅はるか、安納芋、なるっこなど多くの種類のさつまいもが栽培されており、それぞれ味や色、食感に特徴がある。そこで、それぞれの品種のさつまいもを試食し、用途に応じて使用する品種を設定することにした。試作を重ね、芋けんぴには、甘みの強い紅はるかを使用し、スイートポテトには、甘く濃い黄色の色味が美しい安納芋を使用することにした。また、さつまいもそれぞれの味の違いを楽しんでもらいたいという思いから、4種類の焼き芋を作成することにした。完成した芋けんぴとスイートポテト、焼き芋を伊方町主催で行われたイベントである「佐田岬ワンダークリスマス」で出品した。当日は多くの人に購入してもらうことができ、生徒たちの自信につながった。特に、夕方からのイベントで気温が低かったこともあり、ピザ窯を使用して焼き上げた焼き芋が好評であったが、完成までに時間がかかりすぎるといった課題も出てきたため、今後改善していきたい。年度当初は、国道九四フェリーや瀬戸アグリトピアを活用したツアープランの作成を計画していたが、本年度は時間の都合もあり完成には至らなかったため、来年度は実現に向けて研究を続けたい。また、町内の施設や自然を活用した体験活動プログラムの開発などにも取り組んでいく予定である。



④ せんたん部

せんたん部とは、地域活性化に取り組む有志のグループであり、これまでに地域活性化シンポジウム「せんたんミーティング」の開催や、地域PR映画「せんたんビギンズ」の作成などを行ってきた。せんたん部という名前には、「四国最西端の高校から最先端の取組を

行う」という思いが込められている。本年度は、マーマレード作り、みさこうマルシェ・せんたんミーティングの開催、せんたん劇場の企画・運営などを行った。

三崎高校の中庭には、かつて三崎地区の重要な特産品であった「だいたい」の木が4本植えられている。現在、伊方町の柑橘の主力品種は、清見タンゴールや、デコポン、紅まどんななどであり、だいたいを生産している農家はほとんどない。本校のだいたいも、地元農家の人に寄贈してもらった貴重なものである。しかし、だいたいは酸味の強い柑橘であるため、これまではその実は食べられることも、活用されることもほとんどなく廃棄してきた。これまでも、このだいたいの実を活用できないかという意見も出たが、決定的な案がなく、これまでは活用できずにいた。

その様な時、マーマレードの世界大会である「ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル」が開催されることを知った。これをきっかけに地域の新しい特産品を作ることができるかもしれないと考えたせんたん部の生徒たちは、マーマレード作りに挑戦することになった。これまでにマーマレードを作ったことのあるメンバーがいない上、三崎高校は普通科の学校で農業科や食品科がないため、専門的な知識がない生徒たちにとって、味のバランスの良いマーマレードを作るとは簡単ではなかった。家庭科教諭にもアドバイスをもらいながら、毎日少しずつレシピを変えてはマーマレードを作った。最終的には、三崎産のはちみつを加えることで、酸味と甘みのバランスの取れたマーマレードを作成することができた。保護者に分けてもらった清見タンゴールをブレンドしたものも作り、4種類のマーマレードが完成した。

結果は銀賞1、銅賞2というものだった。金賞は逃したものの、3品入賞したこともあり、生徒たちは新しい特産品としてのマーマレード作りに手ごたえを感じていた。来年度のアワードでの金賞を目指して、過去のアワードで金賞を受賞した講師による講習会に参加するなどして研究を重ねている。金賞を獲得し、「高校生がレシピを考案した世界大会金賞マーマレード」というブランドを生かし、地域の方に生産・販売をしてもらうシステムを作ることが現在の目標である。そうすることで、地域の新しい産業作り、地域の活性化につなげていきたい。



8月にはみさこうマルシェの企画・運営を行い、イベント班やカフェ班、商品開発B班などの生徒と協力して大勢の来場者に楽しんでもらうことができた。9月には第3回となるせんたんミーティングを実施し、県内外から6高校の生徒に参加してもらい、交流を通して多くのことを学んだ。

さらに、1月にはフジテレビの「BACK TO SCHOOL!」というテレビ番組で本校が取り上げられることになったが、その中でモデル・タレントのローラが、せんたん部の生徒たちと一緒に地域おこしに取り組むことになった。そして、ローラとせんたん部の生徒たちが作り上げたのが裂織りを使った新商品である「裂織りのシュシュ」である。テレビ放送の段階で形

にはなったものの、実際に商品化して販売するにあたっては、やや重さがある、裂織りに強度がありすぎシュシュのゴムが効きにくい、といった解決すべき課題もあった。そこで、縦糸を細いものに変えたり、横糸にする布を薄いものにしたりとといった素材の工夫や、耐久性と重さのバランスの取れた密度で編むといった編み方の研究を重ねた。また、色合いもより華やかなものにするといった改良も行った。放送終了後から多くの問い合わせがあったこともあり、せんたん劇場などのイベントで販売したが、すぐに完売するという人気を見せている。現在もより良い商品になるよう研究を進めているが、やはり安定した商品供給と販売方法が今後の課題である。地域の伝統を生かしながら、地域の新たな特産品となる可能性を秘めた商品であるので、地域の人と協力してこれらの課題の解決を行っていききたい。その他にも、まち歩きガイドの実施や、サイクリングコースの開発、三崎製錬所跡の研究などの地域活性化プランの作成等を行っていく予定である。



せんたん部は、様々な企画の立案や運営、事例発表を行うなど、本校の地域との協働活動におけるシンボルともいえる存在である。しかし、せんたん部として活動する生徒には、これまで大きな行事の企画・運営を行ったことがなかったり、人前での発表に苦手意識を持っていたりしている生徒も少なくない。せんたん部はその活動内容から、他の班の生徒よりも外部の人と関わることや、校内外を問わず話し合いをする機会が多い。そのため、企画力やコミュニケーション能力などの力が、日々の他者との協働活動を通して自然と伸長していると考えられる。今後は、せんたん部の事例をモデルケースにし、他の研究班における活動はもちろん、教科の授業や学校行事等においてもこのような「他者との協働活動による生徒の成長の仕組み」というものを、より推進していくことができるよう、カリキュラム開発等の研究を進めていきたい。

各班における研究活動が、本事業の探究的な学びの中心となる活動である。本校は、他地域から入学してきた生徒や、中学校時代につまづきを経験している生徒など、多様な生徒が在籍している。入学時には、伊方町への関心や愛着が低い生徒や、各班8人程度の少人数の班とはいえ、班活動や他者との協働を伴う探究活動を苦手としている生徒も少なくない。しかし、このような研究活動を通じて生徒は大きな成長を遂げ、伊方町への愛着を高め、探究活動に意欲的に取り組んだり、人前で堂々と発表したりすることができるようになってきている。個別最適化された学びの提供という観点からも、生徒一人一人がさらに意欲的に研究に取り組むことができるプログラムの開発に、来年度も取り組んでいきたい。

(3) 県外フィールドワーク

県外フィールドワーク・講演会として、7月30日、31日に山形県で開催された「第2回全国高等学校小規模校サミット」に参加し、生徒たちは全国の高校生と交流する機会を得た。他校の事例発表を聞いたり、多くの高校生と交流したりすることで、生徒たちは大きな刺激を受

けるとともに、思考力や判断力、コミュニケーション力などの力を育成することができた。本校は、全体会で唯一の事例発表校ということもあり、参加生徒たちは準備段階から意欲的に取り組み全体発表を行うことで、大きく成長していた。

(4) 地域おこし講演会

10月には、株式会社ハッシュダイより勝山恵一氏を講師として招き、「CHOOSE YOUR LIFE～自分の人生を自分で選択しよう～」という演題で地域おこし講演会を行った。生徒からは、「自らが動くことで、多くの人との関わりが生まれ、人生が変わることが分かった。今後の三崎おこしでも自分から積極的に行動したい」、「自分の人生を自分で選ぶことの大切さを考える良い機会になった。自分の高校卒業後の進路についてしっかりと考えたい。」といった感想が見られた。

本校の生徒は、地理的に他校生や外部人材との交流が難しい状況にある。そのため、このような機会に多くの人と交流することは、非常に貴重な機会であり、交流から刺激を受け新たな気づきを得る生徒は多い。このような外部の人との交流の中で、新しい知識を得たり、意見交換をしたりすることによる学びの効果は大きい。また、そうすることで、自分たちの地域や自分たちの活動を客観的視点から見つめ直すことにもつながっており、自己評価・改善のプロセスとなっている。



(5) 地域理解

1年生を対象に5月に三崎地区の地域見学を行った。入学後間もない時期に地域見学を行うことで、地域理解を深めるとともに生徒の親睦も図った。第1回目は、班ごとに学校から地域の名所や商店を経由して「はなはな」まで歩いて行き、みっちゃん大福を購入するという活動を行った。第2回目は、伊方町最高峰の伽藍山に登り、展望台から町内を展望するという活動を行った。

年度当初にこれらの活動を行うことで、1年生の伊方町への関心や愛着を高めることにつながった。これは、その後に行われた町内の各行事等に参加する1年生が例年以上に増加したことや、学校魅力化評価アンケートにおいて、満足度を含め1年生の数値が高かったことからもうかがえた。

他地域からの入学生が増加傾向にある本校にとって、1年生の早い段階でこのような地域理解活動を行うことは、その後の3年間の地域との協働活動における基礎となる。来年度は、学校設定科目の中に編成することで、より系統的な活動になるように計画している。



2 集落等コミュニティ課題解決・実践プログラム

伊方町は、日本一細長い佐田岬半島に位置しており、東西 40 キロメートルほどの中に、およそ 40 の集落が点在している。そのため、現在でも集落ごとに独自の文化が残っている反面、多くの集落で若者の流出による過疎化が進んでおり、伝統行事や文化の継承が難しくなっているという課題も抱えている。それらの集落の活性化なくして、町全体の活性化にはつながらないと考え、「集落等コミュニティ課題解決・実践プログラム」に取り組むことにした。しかし、それぞれの集落の持つ魅力や抱える課題はそれぞれである。そのため、各集落に合わせたプログラムの作成が必要であると考え、本年度はその第 1 回目として 2 月 15 日、16 日に、旧瀬戸町大久地区で、各研究班の合同イベントとなる「せんたん劇場」を開催した。

大久地区を一つの舞台と見立て、アート班を中心に地区内をアート作品で彩り、第 1 幕から第 4 幕までの四つのプログラムを実施した。

第 1 幕「集落でであう」では、昨年度撮影した映画「せんたんビギンズ」スタッフによる撮影裏話「せんたんビギンズトーク」、情報・防災班主催の防災紙芝居と防災カルタ、イベント班主催の「みさこうたいそう 115」と大久地区の伝統行事である「しゃんしゃん踊り」などのプログラムを実施して、200 名以上の参加があった。保育園児から高齢者まで、多くの地域の人と交流することができた。プログラムの合間には、瀬戸地区名産のさつまいもを使って商品開発 A 班が作ったスープと焼き芋、コーヒーをカフェ班が作ったリヤカー屋台で振る舞い、交流を深めることができた。また、今年度開発した「あいたおる」と「裂織りのシュシュ」を販売し、好評を得た。



第2幕「集落をあるく」では、商品開発B班がガイド役になり、60名以上の人に参加してもらい、大久ツアーを行った。外部講師として建築家や芸術家に参加してもらい、それぞれの視点から大久地区の魅力を語ってもらったり、地域の人に地区の神社についての由来や説明をしてもらったりするなど、特別な体験が多く、地域理解が深まる活動を行うことができた。



第3幕「集落をかたる」では、せんたん部主催のせんたんビギンズ上映会が行われ、18時開始という遅い時間にもかかわらず、40名以上の参加者があった。上映後には「自分たちの住んでいる町の魅力に改めて気が付いた」「自分たちの町を高校生と一緒に守っていきたい」という感想をもらい、励みになった。

第4幕「集落をあそぶ」では、イベント班主催のウォークラリーである「大久ラリー」が行われ、8チーム30名程度の参加があった。大久地区のポイントを巡りながら写真を撮影してもらい、写真コンテストも開催した。参加者にも、大久地区の魅力を再発見してもらった機会になった。



本事業の実施に向け、生徒たちは、それぞれの班でプログラム作成、地域の人への依頼・交渉、現地調査・インタビュー、制作など様々な活動に取り組んだ。本校では、地域との協働活動に取り組み始めてから今年で5年目になる。しかし、これまでは研究班単位での活動が中心であり、全校生徒が一つのプログラムを行うことはなかった。また、関係者との調整などの作業は教職員が行うことがほとんどであったため、このような形でのプログラムの実施は初めてであった。そのため、スケジュールの管理や実施内容の選定などで苦勞する班もあったが、それぞれの班で話し合いを重ね、地域の人や外部人材を効果的に巻き込むことで、成功させることができた。生徒たちは、振り返りの中で、「想像よりも多くの人に参加してくれてうれしかった」、「地域の人と一緒に活動できて楽しかった」、「準備に時間がかかってしまったので、次は計画の段階からもっと練りこみたい」、「他の地区でもこのようなイベントを行いたい」という意見が見られた。本事業の目的として「ブーメラン人材の育成」を、目標としてこれか

らの時代をたくましく生き抜く力と郷土愛の醸成ということを設定している。地域の集落の中に入り、地域の人たちと共に活動することは、生徒にとって負担となる部分もあるが、それ以上に得られるものが多く、本事業における目的・目標を達成するためには不可欠であると感じた。また、地域との協働という観点からも課題研究の成果を広く地域に発信し、評価してもらう良い機会になると考えている。

来年度以降も、今回作成したりヤカー屋台を活用して、町内の各集落等で交流活動を実施していく予定である。

3 各教科・科目における取組

本校では、週に1時間、全学年同時間に開講されている総合的な学習（探究）の時間を中心に、地域との協働による探究的な学習を実施している。しかし、活動が活発になるにつれ、その1時間では時間が不足してしまうことになり、放課後や休日に活動を行わざるを得なくなってしまい、生徒・教員ともに負担が増加してしまっているという課題が見られるようになってきている。そこで、それぞれの教科の授業の中で地域との協働による探究的な学習活動を行うことにより、そのような負担を減少させるとともに、より大きな教育的効果を得ることを目指し、各教科・科目における研究を行った。

家庭科の授業では、3年生の「子どもの発達と保育」の授業において、災害発生時等を想定した簡易オムツづくりや、牛乳パックを使用した食器づくり等を行った。授業後には、「もし、災害が起こってしまったときに、今日の授業で習ったことを生かして自分のできることをやりたい。」「災害が起こったらどうなるか、あまり考えたことがなかったけれど、自分には何ができるのかを考えておかないといけないと思った。知らないと何もできないと思う。」「今日習ったことを家族にも教えたい。」といった感想が見られた。本校は災害発生時に地域の緊急避難場所に指定されているが、生徒の防災意識や防災に関する知識が特別に高いわけではない。そこで、この様な身近な内容から取り組むことが生徒の防災意識の向上につながると感じた。情報・防災班の活動と連携することで、高校生だけではなく、地域の人たちの防災意識を高められるような活動を行っていききたい。そして、誰もが助け合い、安心して暮らせる町であるという地域の新たな魅力創出につなげていきたい。

また、家庭科では、地域の人を講師に招き、郷土料理の調理実習を行うという授業も行った。他地域からの入学生はもちろん、町内の生徒たちにおいても郷土料理を作ったことがない、あまり食べたことがないという生徒は多い。地域の伝統を知ることは地域理解、地域愛の醸成につながる。そこで、比較的身近な料理である「ばら寿司」と「さつま汁」をメニューに選び、2年生の「家庭総合」と3年生の「フードデザイン」の授業で各2回実習を行った。ばら寿司に柑橘の果汁を混ぜたり（今回は中庭のだいだいを使用）、さつま汁に地域の特産品であるアジを使ったりするなど、この地域ならではの素材の選び方があり、生徒たちも作り方だけではなく、身近な素材を使うことにも興味を持っていた。生徒だけではなく、講師として参加してもらった地域の人たちも「高校生と一緒に料理ができて楽しかった。」「高校生がおいしそうに食べてくれているのを見ているとうれしい。」と喜んでもらった。この授業を通して、郷土料理への興味・関心を高めるだけではなく、地域の人と交流を深めることもできた。料理を通して地域の伝統や文化を知ることができる上、地域に住む異年齢層の人と交流ができる貴重な時間にもなり、学習効果も非常に高いので、来年度以降もぜひ続けていきたい。



国語科の「国語表現」の授業において、地域の民話を題材にした紙芝居づくりを行った。完成した紙芝居のストーリーを基に「音楽Ⅲ」の授業で伴奏を付け、地域の保育所で披露した。地域のものとはいえ民話に触れる機会はほとんどなく、生徒たちにとって決してなじみが深いものではない。今回は郷土誌に収蔵されている話の中から、各班で一つ素材とする民話を選んだが、全ての班において、班の中にその話を知っている生徒は誰もいないという状況であった。そのため、地域に古くから伝えられてきた民話を読み、興味のあるものを選び、紙芝居にしていくという作業は、生徒たちにとっても新鮮で楽しかったようである。民話の多くは方言で書かれているものが多く、町内出身の生徒が町外出身の生徒に方言の説明をしたり、場所の説明をしたりする場面が多く見られた。町内出身の生徒にとっては、自分たちのふるさつを見つめ直し誇りを持つ機会となり、町外出身の生徒にとっては、伊方町への関心をより高める良い機会になった。また、保育所で発表した生徒は、子どもたちが絵や音楽に反応し、喜んでくれたことで達成感を感じていた。高校生と保育園の園児が交流する機会はほとんどない。園児に分かりやすく伝えるにはどうすれば良いか、どのように接すれば園児たちが楽しんでくれるのか、といったことを考えて活動することは生徒にとって貴重な体験になったようである。また、園児や保育士の人たちにも喜んでもらうことができ、今後も続けていきたいと感じた。



家庭科や国語・音楽の授業における研究を通して、教科の内容を学ぶことにとどまらず、外部へと開かれた授業にしていくことは高校側、地域側の双方に利益があるということが分かった。さらに、高校生がハブになり、地域に住む全ての人をつなげていくという新しい地域づくり、場の提供が行えるのではないかとこの可能性を感じることができた。来年度以降は、そのようなことも念頭に置いた授業作成を行うとともに、各教科における地域との協働による授業の研究を行っていきたい。

来年度は、より系統的かつ持続的なプログラムを編成するために、学校設定科目「未咲輝学」の設置を予定している。また、理科の授業で電力関係の人を招いてエネルギーに関する授業を行ったり、国語科や地歴・公民科の授業において、地元郷土館の学芸員の方を招いて地域の歴史に関する授業を行ったりすることなどを検討しており、各教科・科目における地域との協働による探究的な学びをさらに推進していく予定である。

4 視察研修

(1) 第2回全国高等学校小規模校サミット（山形県立小国高等学校）

① 参加の目的

全国の小規模高校の生徒が交流し親睦を深めるとともに、各校・地域が抱える課題について意見交換し、将来それぞれの地域で活躍する資質や能力、協働意識を育成する。

② 期日

令和元年7月30日（火）～7月31日（水）

③ 小規模校サミットの目的について

- ・全国の高校生が、日ごろから行っている、地域や学校での様々な活動を通じて、地域を盛り上げたいと考えている高校生同士のネットワークを構築する。
- ・小規模校同士、誇りを持ち、関わり合って新たな発見をする。
- ・地域課題先進地域である、過疎地での取組を共有することで、将来の日本、未来の自分について考える機会とする。

④ 参加校

岩手県立伊保内高等学校、岩手県立岩泉高等学校、岩手県立住田高等学校、岩手県立花泉高等学校、岩手県立古北高等学校、宮城県立津川高等学校、宮城県立松山高等学校、山形県立荒砥高等学校、山形県立新庄南高等学校金山校、山形県立小国高等学校、福島県立川口高等学校、福島県立新地高等学校、新潟県立正徳館高等学校、三重県立飯南高等学校、愛媛県立三崎高等学校、高知県立大方高等学校、長崎県立平戸高等学校、熊本県立天草高等学校倉岳校
10県18校

⑤ スケジュール概要

【1日目】

- ・プレセッション

【2日目】

- ・セッション1 参加校取組紹介、全体発表、分科会発表
- ・セッション2 講演
- ・セッション3 ワークショップ

⑥ 研修内容及び生徒感想

ア プレセッション

サミットの前日にプレセッションとして参加者交流会があった。最初にアイスブレイクとして、名前シールの右上にあるイラストが同じ人を探してグループになり、自己紹介をするという活動をした。小規模校サミットと言いながらも、日本中からたくさんの生徒が参加していたため、会場は一杯で、最初はとても緊張したけれど、このアイスブレイクですぐに打ち解けることができた。それから、一緒にご飯を食べたり話をしたりした。小規模校の集まりなので、話していると共通点がたくさんあって、盛り上がった。

次に各高校が地元の特産品・魅力を紹介した。特に印象に残ったのは、熊本県の天草高校倉岳校の生徒が地元の方言全開で話したり、地元出身のバンドWANIMAの限定グッズ等を披露したりしていたことだ。私たちは、三崎おこしで研究している裂織りについて紹介した。実物を持って行っていたのだが、発表の後に実際に裂織りを触りに来たり、質問してくれたりする人が多くいて、うれしかった。

会の最後に、サプライズで、小国町在住のシンガーソングライターの方が歌を披露してくださった。みんなで一緒に聞くことで、さらに一体感が深まりまった。

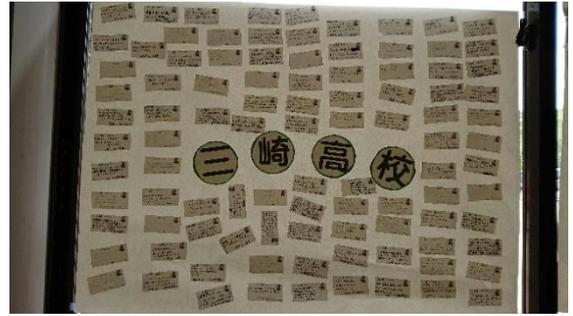
短い時間の活動だったが、とても楽しい時間を過ごすことができた。このプレセッションを通して、初めて会った他校生との交流が深まり、次の日からの活動が楽しみになった。



イ 全体会

全体会では、最初にアイスブレイクの時間があり、自己紹介ゲームを行った。昨日行われたプレセッションでも他校の人とは話したが、100人以上の参加者がいたため、ほとんどの人とは初対面だった。しかし、昨日の交流会で他の学校の雰囲気をおおまかに知ることができていたため、初対面の人ともすぐに仲良くなることができた。アイスブレイクが終わった後は全体会での事例発表が行われたが、全体会の発表は三崎高校だけだったので、とても緊張した。私たちは、せんたんミーティングやみさこうたいそう 115、裂織りの研究などについて発表した。発表時間は8分間と分科会で発表する学校の5分よりも長い時間をもらっていたが、あっという間に時間が経ってしまった。最後のまとめを発表する時間が足りなくなり、まとめを省略しなければならなくなったのが本当に悔やまれた。しかし、他校の人に書いてもらった感想を見てみると「三崎高校の取組は、どれもすごく独創的で面白そうだった。自分たちの学校でもやってみたい。」、「堂々と発表していて内容がすごく分かりやすかった」、「三崎高校は自分の学校よりも生徒数は少ないけれど、色々なことにチャレンジしていてすごいと思った」と書かれており、私たちの発表で三崎高校に興味を持ってもらうことができたようでうれしかった。今まで、他の学校の取組、しかも県外の学校について聞いたことがあまりなかったので、自分たちの取組が他の学校の人から見るとどのように見えるのか、ということについてもあまり考えたことがなかった。しかし、今回の発表を通して、自分たちの学校の取組について自信を持つことができたし、もっと他の学校の取組についても知り、交流したいと思うようになった。

今回、小規模校サミットに参加したメンバーは、これまでこのように人前で発表したり、他校の人と交流したりするという経験がほとんどなかった。発表も練習して本番に臨んだが、うまくいかないところもあった。私は、今年からせんたん部として活動しているので、今回の発表でも自分が引っ張りたいと思ったけれど、思うようにはいかなかった。先輩たちがいろいろな場面で堂々と発表しているのを何回も見ただけ、すごく準備をしているからあれだけの発表ができるのだということに気付いた。これからは、普段の学校生活や総合的な学習の時間などに、もっと積極的に行動したり、自分の考えをしっかりと言ったりして、このような機会でも自分たちの言いたいことがしっかりと伝えられるようになりたいと思った。今回、小規模校サミットに参加して、全国から集まった人たちと交流してすごく楽しかったし、本当に勉強になった。最初は、今まで行ったことのない山形県に行くということに不安な気持ちもあったけれど、今では、参加して本当に良かったと思っている。



ウ 分科会

(ア) 岩手県立住田高等学校

住高ハウスという、住田高校生が放課後自由に過ごせる場所づくりの取組や、保育園児と一緒に過ごす森の保育園ボランティア、桜ライン 311 について発表していた。

住高ハウスは勉強ができるだけでなく、話し合いなど様々なことに使えるそうなので、とてもうらやましいと思った。伊方町には、学校以外には高校生が集まって自由に使うことのできる建物がない。そのため、三崎おこしの話し合いなども、部活が終わった後や休みの日に学校で行っている。しかし、学校は先生がいないと使えないし、気分転換もしにくい。このようなスペースがあれば、三崎高校の活動ももっと活発になるのではないかと思った。

桜ライン 311 は、1 年生が陸前高田市で桜の植樹を行う活動で、東日本大震災を経験した者としての意識を高めること、桜並木を作ることで避難の重要性を形にすることが目的で行っている活動だという説明を受けた。伊方町はこれまで、地震や津波の被害はほとんどなかった。しかし、東日本大震災以上に大きな地震になるかもしれないと言われている、南海トラフ大地震の発生が予想されている。その時までには、私たちが準備しておかなければならないことがたくさんあると、住田高校の発表を聞いて思った。

まだ、三崎高校ではやったことのないような取組がたくさんあったので、これからの私たちの活動にも取り入れていきたいと思った。

(イ) 山形県立小国高等学校

小規模校サミットを開催するまでに行った準備や、研修についてのことを発表していた。当日の運営はもちろん、全国の参加してほしい高校へ直接手紙を書いたり、ファシリテーションの研修を受けたりしていて、長い時間の努力の積み重ねでこの 2 日間が行われていることがよく分かるとともに、大変さが伝わってきた。

三崎高校でも、せんたんミーティングのような大きな行事を行っているが、実際には、どのような準備をしてせんたんミーティングが行われているのかは知らなかった。しかし、小国高校の発表を聞いて、何か大きな行事を行うには、本番と同じかそれ以上に計画や準備が大切なのだということが気が付いた。私は、どちらかというと人前に立つのがあまり得意ではないけれど、裏方として何かにかっこつと取り組むことは苦にならない。だから、そういった形で三崎高校が開催している行事にも参加してみたいと考えた。今年も 9 月にせんたんミーティングが行われる予定なので、ぜひ、参加してみようと思う。また、機会があればこのような交流会にも参加してみたい。そして、今回の全体発表の

ように人前に立つことがあれば、頑張って発表してみようと思う。

小国高校さんのおかげで良いサミットが運営され、そのサミットに参加することができ、本当に良い経験になった。

エ 講演会

東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科長の岡崎エミ先生から、「最先端は辺境にあり！小規模校だからできる地域づくり学習」という演題で話をしてもらった。今の社会は常に変化して、予測しにくいことだけが分かっている。これからの時代を生きていくためには、「やってみよう」と思えることが大切だという内容が強く心に残っている。私は、これまで「やってみよう」と思っても行動できなかったことが多いからだ。やってみようと思っても、失敗したらどうしようと考えて行動できないことが何回もあった。今回の小規模校サミットも、先生に誘われたときに面白そうだとは思ったけれど、知らない人の前で発表したり話し合いをしたりするのは嫌だなと思った。でも、このような機会はないかも知れないと考えて思い切って参加した。発表は少し時間が足りなくなってしまったけれど、色々な人にほめてもらえたとし、他の学校の発表を聞くのも楽しかった。他の学校に人と仲良くなることもできた。今回、「やってみよう」と思って参加したことで、少し自分を変えることができたと思う。

岡崎先生が、小規模校には世界を変えるチャンスがあると言っていたけれど、自分にも何かできるのではないかと思えるようになった。2年生になったらせんたん部に入り、いきなり世界は難しくても、学校や伊方町がもっと良くなるように活動していきたい。

オ ワークショップ

最初にアイスブレイクとしてグループでヒーローインタビューを行い、自分が今までで一番活躍したことについて紹介した。アイスブレイクも三回目だし、何人か顔見知りの人でもできたので、すぐに仲良くなることができた。

アイスブレイクが終わると、次に「地域の魅力」について話し合った。地域の魅力を付箋に書いて模造紙に貼ってグループ分けを行った。小規模校の人たちの集まりなので、どの意見もすごく共感できるもの多くて、意見が言いやすかった。でも、他の人の意見を聞いていると「田舎」と言っても地域によって特徴があるし、三崎はその中でも特に田舎だとも思った。

その後、グループのリーダーを残してまた新しいグループを作り、前のグループの人が出した意見を基に話し合いを進め、より深く「地域の魅力」について話し合うということを繰り返した。その時は十分話し合いをしたと思っても、話し合いを重ねるたびに新しい関連性が見つかったり、発見があったりして面白かった。いろいろな地域から来ている人たちが話し合いをするので、それぞれの立場や経験からの意見が出てきて、どんどん話し合いが進んだ。

最後に、グループで「10年後それぞれの地域・学校はどうなっているか」を考え、それぞれの学校でできることを考えた。ワークショップで色々な地域、色々な学校の話聞いていたので、考えやすかった。私たちのグループは、「小規模校は小規模校のままで残っていて、地域は今よりも元気になっている」という未来を考えた。そのためには、それぞれの学校が行っていることを共有して、どんどん新しいことを取り入れていきたい、という結論になった。他のどのグループも明るい未来を予想して聞

いているだけでワクワクしてきた。

最初は、一日活動するのは大変だと思っていたけれど、終わってみればあっという間だった。最後に、みんなで記念写真を撮ったけれど、なかなか別れにくかった。今回、小規模校サミットに参加して本当に楽しかったし、参加する前よりも学校や伊方町のことが好きになった気がする。参加して本当に良かったし、もし機会があれば、来年もまた参加したい。



カ 引率所感

全国から18校、130名を超える高校生が参加しており、本校の生徒も最初は緊張していたが、アイスブレイクを通してうち解け、その後の交流会では他校の生徒ともしっかりコミュニケーションを取ることができていた。また、交流会の中で、各地域の特産品について紹介し合う時間があったが、三崎の特産品である「裂織り」について、堂々と説明することができていた。本校の生徒が、「独特の手触りなのでぜひ一度触ってみてください」という説明を行い、その後、他校の生徒が何人も触りに来てくれるなど、好評であった。

本校は、全体会で唯一の事例発表校であった。今回参加した生徒たちは、1・2年生のみであり、これまで多くの人前でプレゼン等を行った経験がほとんどないメンバーであったが、与えられた8分間の中で堂々と発表を行い、多くの方から賞賛のお言葉をいただくことができた。その後の分科会発表では、生徒がそれぞれ興味のある学校の発表を聞き、見識を広めることができていた。

講演では、東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科長の岡崎エミ先生から、小規模校や過疎地域と呼ばれる地域の持つポテンシャルや可能性についてお話をいただいた。生徒たちは、岡崎先生のお話に大きな刺激を受けていた。

セッション3のワークショップでは、「小規模校だからこそできることを考えよう！」というテーマで、小規模校ならではの強みや、小規模校同士での連携などについて他校の生徒と積極的に話し合いをすることができていた。それぞれ学校のある地域は異なるものの、「小規模校」という共通点から見えてくるものがあったり、他校の生徒の話から参考になるものを得たりと、生徒たちは生き生きと活動できていた。

生徒たちは、2日間の各プログラムを通して貴重な経験を積むことはもちろん、他校の生徒と連絡先を交換するなど交流を深めることができていた。今回の研修での経験を生かし、今後の「三崎おこし」が、より活発な活動となるように各グループのリーダーとして積極的に活動するとともに、今回ネットワークを構築した他県の生徒たちとも継続的な交流を行ってほしい。

(2) 熊本県立上天草高等学校

① 参加の目的

本校と同様に「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定を受けている上天草高等学校の、研究成果発表会に参加することで、その取組やカリキュラムについて学び、本校の活動に役立てる。また、効果的な成果普及の在り方についても学ぶ機会とする。

② 期日

令和2年2月5日（水）

③ 上天草高校について

上天草高校は、熊本県上天草市にあり、普通科、情報会計科、福祉科の3科を設置している学校である。全校生徒数は80名程度の小規模校であり、卒業後は進学する生徒と就職する生徒が半々である。平成28年度には県立高校魅力創造発信事業指定校に、平成29年度には総合型コミュニティ・スクール指定校に、平成30年度にはスーパーグローバルハイスクール指定校になるなど、継続して地域と連携した取組を行っている学校である。

本年度より、本校と同じく文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定を受けており、地域課題の発見・解決に向け、「上天草プロジェクト」に取り組んでいる。

④ 生徒研究発表会感想

今回の研究発表会は、1年生が科を越えてグループを作り、それぞれの班で地域活性化のためのビジネスプランを作成し、発表するというものであった。それぞれの班は、2名～4名程度のメンバーで構成されており、17班が発表を行った。

消臭剤やジャムなどの商品開発に関するプラン、映画上映を通して住民の交流を図るプラン、害獣である猪を利用したジビエについてのプランなど、各班で個性的なプランが考えられていた。特徴的であったのは、すべての班において、収支計画が立てられていたことである。収入はもちろん、人件費や宣伝広告費などの経費などについても考察されており、より実現性の高いプランとなっていた。また、1年目だけではなく、3年目や5年目には収支がどのように変化していくかという考察もされており、経営的観点を取り入れたプラン設計になっていた。

本校でも、各班が様々な探究活動を行っているが、経営的観点を取り入れた計画や活動はほとんどない。しかし、産業の6次化や起業家育成について学び、実践していくためには経営的観点は必要不可欠である。今後、本校の探究活動においても、そのことも念頭に置いて研究を進めていきたい。

⑤ 所感

県内校の事例発表等を聞く機会は多いが、他県の高校生の研究発表を聞く機会はあまり多くないため、発表内容はもちろん、進行の様子や生徒の動き、資料作成のやり方など、多くのことから刺激を受けることができた。今後の本校の活動に生かしていきたい。

5 成果発表会（未咲輝 - せんたん - 発表会）

(1) 期日

令和2年2月20日（木）

(2) 実施内容

13:00～13:10 開会式

13:10～14:10 成果報告会

14:10～14:30 講評及び閉会式

(3) 概要

発表順	担当グループ	せんたん部	内容
1	情報・防災	楠 彩菜	活動報告、防災カルタの実施
2	アート	酒井 颯斗	活動報告、「せんたん劇場」での作品展示
3	商品開発	古澤 美咲	活動報告、裂織り体験の実施
4	カフェ&ツアー	大石 玲生 近藤 亜紀	活動報告、カフェの実演販売、移動式カフェの展示
5	イベント	大西 友海	活動報告、みさこう体操及びじゃんしゃん踊りの披露

せんたん部担当生徒が担当グループの活動の紹介を行う。（2分）

その後、各グループによるプレゼンテーションまたはパフォーマンスを行う。（8分）

(4) その他

今回の発表会では、来場者からすぐに感想をもらえるようにウェブ上での感想記入用のフォームを作成した。

(5) 詳細

① 情報・防災班

情報・防災班は、主に「防災」の観点でこの1年活動を行ってきた。今回の発表会では、2月に行ったせんたん劇場で初披露した「防災紙芝居」を改めて披露した。せんたん劇場では、観客を巻き込んだ発表を行い、子どもから大人まで学びの深い紙芝居になっていた。来年度は、かねてから計画をしていた「防災マップ」を完成させることを目標に活動をしていく。



<感想>

- ・ 紙芝居お上手でした。これからも地域の防災のために頑張ってください。
- ・ 実態に即した新しい観点での訓練ができていた。デラ台風とは、どれくらい台風でしょうか？
- ・ 取組がわかりやすく、防災マップの作成など地域の安全のことを第一に考えているという感じがしました。

② アート班

アート班は、せんたん劇場で行った軽石を使ったモアイ像作品作りを来場者の目の前で披露した。この1年間は未咲輝ロードの修復を主に行い、生徒たちが気持ちの良い登下校ができるように努めた。そして、せんたん劇場では、町内・町外の区別なく、地域を盛り上げるために大久地区の景観を生かしたアート作品作りを行った。来年度は、今年度着手できなかった海岸の壁画づくりやブイを使ったアートイベントも行っていきたい。



<感想>

- ・ 実演しながらの発表は楽しいものでした。
- ・ 大久のアートは観光スポットになるかもしれませんね。
- ・ 風や軽石などに目を付け、地域資源として生かすセンスが素敵だと思いました。

③ 商品開発班



商品開発班は、この一年間地域の産物を生かした新しい商品の開発に着手してきた。いもパウム、亀の手ドリア、アカモクホットサンドなどの食べ物はもちろん、佐田岬半島の伝統的な織物である裂織りを使ったシュシュや藍染めのタオル等、様々な商品を開発してきた。発表会では、段ボールで作った裂織りキットで来場者に裂織りを体験してもらった。来年度は、ドライフルーツや燻製などの保存食の開発を本格的に行っていきたい。

<感想>

- ・ 裂織りをお手製の段ボールで再現していたのは素晴らしい。体験用に、さらに使いやすいものを工夫していたのには感心しました。
- ・ 裂織りという文化の継承への取組は大変意義深いと思います。さらに発展させていけるよう頑張ってください。
- ・ 保存食、何ができるか楽しみにしております。

④ ツアー班&カフェ班

ツアー班は、地元の交流施設である瀬戸アグリトピアと連携した活動を行ってきた。令和元年度の伊方町のクリスマスイベント「佐田岬ワンダークリスマス」では、瀬戸アグリトピアで収穫した芋を使った商品の開発及び販売を行った。また、カフェ班は、様々なイベントで「みさこうカフェ」の運営を行い、商品開発班やツアー班が開発した商品の販売を行った。大久で行われた「せんたん劇場」では、手作りのリヤカー屋台を製作し、好評を得た。発表会では、ツアー班とカフェ班が合同でプレゼンテーションを行い、ツアー班が屋台を先導し、カフェ班がコーヒーと焼き芋を振る舞った。来年度は、本格的に佐田岬半島をPRするためのツアーの開発や観光ガイドマップの開発に取り組みたい。また、リヤカー屋台を用いて、伊方町外のイベントにも参加していきたい。



<感想>

- ・ 見ても楽しいし、食べてもおいしいです！特に移動販売車が目を引きました。
- ・ サツマイモに着目したのはとてもいいと思う。嫌いな人は少ないので。移動式屋台をイベントのシンボルとして活用すれば、定着すると思います。
- ・ 移動式屋台、これから活動の可能性がどんどん広がりますね。美味しいコーヒーごちそうさまでした。
- ・ 課題として、他の班とのコラボを掲げていたが、その先にコンテストのようなものに応募してみるのはいかがでしょうか。

⑤ イベント班



イベント班は主に「みさこうたいそう115」の普及を行ってきた。地域のイベントへの参加はもちろん、地元の福祉施設や幼稚園等にも赴き、地域の人たちと一緒に体操を行った。今回の発表会でも参加者全員でみさこうたいそう115を行い、大きな輪を作ることができた。来年度は、脚の不自由な高齢者のために座ってできるみさこうたいそうの開発など、よりターゲットを絞った新しい体操の開発に努めていきたい。

<感想>

- ・ はじめて本格的に体操をしました。心も体もあたたかくなりました。ありがとう。
- ・ みさこう体操、楽しくて覚えやすい！最高です👍
- ・ 楽しかったです。リーダーだけでなく、みんなで声を合わすともっと盛り上がるよ。
- ・ 地域のものだけでなく、人の温かさを感じられる活動をしていると感じました。

(6) 全体の感想

三崎おこしプロジェクト全体について

7件の回答

とてもいい発表ばかりでした。もっと沢山の人に披露してもらいたいです。

親しみやすい内容で、周囲を巻き込んだ活動をされていると感じました。参考にさせていただきたいと思います。

これからもどんどん盛り上がりましょう。

それぞれの班で、特色を出しながら工夫していた。今日の発表のように、全ての班が同じ場所で活動するようなイベントがあれば、参加してみたいと思った👍

発表生徒に、笑顔と元気があってよい。元気がもらえますね。さらに元気を地域に与えられる研究に取り組んでください。

少ない時間の中、一生懸命に活動している姿を見てうれしく思います。来年の活動も楽しみにしています。

一人一人に役割があって、楽しみながら学ぶことができているように思いました。

(web フォームより抜粋)